

森下明子、『天然資源をめぐる政治と暴力—現代インドネシアの地方政治』京都大学学術出版会、2015年、250 p.

見市 建*

本書は前後して出版された本名 [2013]、岡本 [2015] に並ぶ「仁義なきインドネシア」三部作、その「カリマンタン死闘篇」というべき一冊である。30年あまりのスハルト権威主義体制を経て、1998年に民主化と地方分権化が進められたインドネシアの国際的評価は高い。しかしその背後には官民の暴力装置が跋扈している、これが「仁義なき」シリーズの通奏低音である。

本書の舞台であるカリマンタンの三州のうち、西・中カリマンタン州（以下西・中カリ）では1990年代末から2000年代初頭に、数ヵ月で500～1,000人ほどの犠牲者と数万人の避難民を生む民族紛争が発生し、他方の東カリマンタン州（東カリ）では暴力的紛争に至らなかった。なぜ三州ではこうした違いが生まれたのか、民族紛争はなぜ長期化しなかったのか、これが本書の問いである。説明変数は政治・経済構造の差異である。ここでいう政治構造とは、地方自治体レベル（州・県・市）の権力者の経歴や人脈、中央との関係、政治的競争のパターンであり、とくに民主化以降の地方首長選挙を分析の対象とする。他方、いずれも豊かな天然資源を有する三州における経済構造は、天然資源の種類、担い手、利権の受益者とそのアクセスの方法

等によって規定される。

本書の構成は以下のとおりである。第1章「暴力・天然資源・地方政治」では、先行研究を踏まえて本書の位置づけを明らかにしている。第一義的には、本書は資源産出地域における暴力的紛争の事例研究である。先行研究では、暴力的紛争の発生と長期化の条件として、①天然資源の開発利益が私的セクターに分配されていない、②紛争発生地域と天然資源との距離が近い場合、が挙げられている。しかしこれらはインドネシアには当てはまらない。政府が一元的に石油・天然ガスを管理していたアチェ州では分離独立運動が起きた一方で、東カリは平穏であった。また中カリの紛争は金鉱近くで始まったが、数ヵ月で収束した。著者はそこで、①政治行政ポストの分配の有無、②紛争当事者が天然資源を資金源にできるか否か、という新たな条件を提示している。インドネシア政治研究としては、民主化後の諸研究を踏まえ、なぜ政治的手段として暴力が用いられる地方とそうでない地方があるのかが説明されていないという。そして地方ごとに異なる天然資源をめぐる利権構造が、政治構造に違いをもたらしているという仮説が提示される。

第2章「カリマンタンの民族紛争」によれば、西・中カリの民族紛争の内実は、行政ポストに恵まれないダヤック人地方エリート層による示威行為であった。その暴力の矛先はポストを握る権力者ではなく、下層の労働市場で競合する移民のマドゥラ人に向けられた。他方、紛争当事者たちには天然資源から得られる莫大な資金へのアクセスはなく、紛

* 岩手県立大学総合政策学部

争は継続しなかった。紛争後ダヤック人は行政ポストを獲得するようになり、政治的利益集団としての民族の役割は低下した。

ではカリマンタン三州の政治・経済構造にはいかなる差異があるのか。第3章「スハルト時代における権力と資源の分配」は大統領を頂点とするパトロン・クライアント・ネットワークが、三州ではいかに構築されたのかを説明する。東カリでは、地方首長ポストは与党ゴルカルと国軍の後ろ盾があれば、民族等の出自に関係なく分配された。中・西カリでは、スカルノ前政権で重用されたダヤック人が次第に周縁化され、地方首長の大半はマレー人やジャワ人になった。民主化・地方分権化以降は、東カリでは中央との結びつきが強いスハルト時代の州政治エリートや国軍出身者が、中カリでは県政のトップ・エリートや地方実業家が、西カリではより低い役職にあった元官僚や主要産業以外の実業家が地方首長に当選するようになった（第4章「民主化・地方分権化後の地方首長の変化」）。

第5から7章はこうした違いを生んだ政治構造と経済構造の結びつきの詳細が順に明らかにされる。東カリ（第5章副題「中央政治に翻弄される州政治エリートたち」）では、スハルト体制期において主要資源である石油・天然ガスの利権は地方に分配されず、大物実業家は育たなかった。民主化後は、資源開発利権を管理する中央政財界との太いパイプを活かした旧来の州レベルの政治エリートが当選した。彼らは中央の権力闘争の影響を受けやすい。政変直後の1998年6月に州

知事になった元軍人のスワルナは2003年に再選されたが、翌年のユドヨノ政権成立によって影響力を失っていった。クタイ・カルタヌガラ県知事のシャウカニと対立、最終的にスワルナが汚職容疑で逮捕された。しかしシャウカニもまた、庇護者のカラ副大統領とユドヨノ大統領が不和になると、汚職容疑で逮捕された。直接選挙制導入（2005年）後の2008年に州知事に選ばれたのはユドヨノの民主主義者党公認候補アワン・ファルク・イシャ（2013年再選）であった。この地方の勝負を決めるのは「頂上」（中央）の権力闘争であり、暴力は有効な政治的手段にならない。

中カリ（第6章「地元実業家の政治的台頭」）においては、スハルト時代に木材ビジネスの下請けで富を蓄えた地元業者が、2000年代に石炭やアブラヤシ事業にも進出、州の広範囲にビジネスを展開する大物実業家に成長した。地方分権化によって地方政府に許認可権が与えられたため、実業家たちはさらなる利権を求めて各地で地方首長を擁立した。他方で分配に与ることのできないダヤック人のエリートたちは、暴力的手段に訴えて「おこぼれ」を得ようと民族紛争を起こした。しかし暴力による影響力拡大は限定的だった。2005年州知事選で当選したテラス・ナランはダヤック人であったが、有力者家族の出身で、地元実業家の協力を得た他、政党のマシンなどさまざまなネットワークを利用してダヤック人以外からも幅広い支持を獲得した。

西カリ（第7章「群雄割拠する中小規模

の地方有力者たち」)では、中カリと対照的に、地元業者が資本を蓄積することができなかった。木材資源がもたらす莫大な利益は、国境を接するマレーシアの業者が吸い上げていた。県レベルで影響力をもったのは中小の企業経営者や伐採キャンプの労働者ボス、民族組織の幹部などであった。資金調達力には大きな差異がないために、ときに暴力も有効な政治的手段となった。スハルト時代には県の郡長に過ぎなかったコーネリスは、1999年の県知事選直前の議事堂焼き討ち事件を契機に台頭、2001年には新設県ランダックの知事に選ばれた。ダヤック人意識に呼びかけて2008年の州知事選で当選すると、アラヤシ開発の許認可権を握った(2012年再選)。¹⁾まさに「成り上がり」である。

終章では、天然資源の存在が暴力的紛争に結びつく条件を考察している。暴力の使用は十分な資金力がない地方政治エリートが、首長選挙に出馬した場合や僅差で敗北した場合に多い。直接選挙制の導入は、政治資金以外にも、州内にまたがるネットワークの重要性を高め、特定民族の利益拡大を目的とする暴力は効果的な政治的手段ではなくなりつつある。また自治体新設によって政治行政ポストがより広範に分配され、競争は同一民族内で行なわれるようになった。民族間の暴力的紛争が再発する可能性は低い。

以下、本書の意義と課題について、主としてインドネシア政治研究者である評者の立場

から、いくつか見解を述べておきたい。まず、1998年以降重要性を増した地方の政治、とくに凄惨な民族紛争が起きた中・西カリについて、国内外の比較の視点を持ち込んで分析を行なった本書の意義は明らかである。論旨は明快であり、また扱いが難しい「民族」(センサス上の区分である suku)とその下位カテゴリーとの関係を政治的利益集団としての機能に絞って鮮やかに捌いている。また第5章以降は表現こそ抑制的だが、地方権力者の台頭過程が生々しく伝わってくる。

課題も指摘しておきたい。まず天然資源をめぐる暴力の研究としての位置づけは本書の視野を狭めてしまったように思える。西・中カリの「民族紛争の特殊性を一言でいうならば、天然資源が(誘因としても長期化の要因としても)関係していない暴力的な紛争であった」(p. 60)とすると、果たして天然資源と紛争についての先行研究への批判として本書のケースが適切だったろうか。

もっともこの点は、インドネシアの地方政治研究においては、本書の事例分析がむしろ高い汎用性をもつことを示している。本書の「民主化・地方分権化による政治的競争パターンの変化の中で、なぜ暴力が政治的手段となったのか」(p. 28)という問いは極めて重要である。しかしそうすると、アチェ州よりも、西・中カリと同時期に起こったボソやアンボンの宗教紛争が比較の対象となるべきだろう。無論、著者は先行研究でそうした比較が行なわれてきたことは十分承知であろうが、本書を対置してその意義を示して欲しかった。また、本書の主眼となった第5章

1) p. 197に記載されている選挙資金8兆5,210億ルピアは85億2,100万ルピアの間違いだと思われる。

以降は「紛争後」の政治であり、暴力が使用される場面はほとんど登場しない。同じく民主化後の政治・経済構造と地方首長選挙に着目し、地方における寡頭制支配の形成を指摘する Hadiz [2010] などの議論にも十分対抗しうる内容を本書は備えている。

では、暴力のあとのインドネシア地方政治には何が来るのか。本書は資本（カネ）の他に、州にまたがる広範なネットワークの重要性を指摘している。近年のカリマンタン政治はさらなるヒントを与えてくれる。前述のシャウカニ失脚から 3 年後の 2010 年、娘のリタ・ウィドヤサリが弱冠 36 歳で同じクタイ・カルタヌガラ県知事に当選した。彼女は「反汚職」を掲げ、「全国最優秀県知事賞」を受賞するなど、悪名高い父親とは対照的な政治家像の形成に成功しているようである。西カリのカプアス・フル県知事選後の暴動 (p. 199) の首謀者と指摘されたアキル・モフタルは、その後憲法裁判所長官まで登り詰めたが、2013 年に中カリを含む複数の地方首長選をめぐる汚職で逮捕され、終身刑を言い渡されている。この事件の余波は中央政界も揺るがしている。鍵となっているのは政治的手段としての「反汚職」である。直接選挙の導入と SNS などを含む新旧メディアが地方まで浸透しつつある条件におけるエリート間の競争の激化は、汚職の取締りが恣意的に運用されるような政治を継続させる一方で、各地で改革派の首長を誕生させ、ときに市民社会の要求実現を可能にしている。さて、シャウカニの娘は、あるいは「成り上がり」コーネリスの後任はどうなるのだろうか。早

くからカリマンタンの政治に目をつけていた著者による続編に期待したいところである。

引用文献

- Hadiz, Vedi. 2010. *Localising Power in Post-Authoritarian Indonesia: A Southeast Asian Perspective*. Stanford: Stanford University Press.
- 本名 純. 2013. 『民主化のパラドックスーインドネシアにみるアジア政治の深層』岩波書店.
- 岡本正明. 2015. 『暴力と適応の政治学ーインドネシア民主化と地方政治の安定』京都大学学術出版会.

杉島敬志編. 『複ゲーム状況の人類学ー東南アジアにおける構想と実践』風響社, 2014 年, 382 p.

山口亮太 *

本書は、杉島が提唱する「複ゲーム状況」について、東南アジア各地のフィールドの事例から検討と分析を行なうものであり、本書の執筆者たちによって 2009 年度から 2011 年度にかけて行なわれた共同研究の成果である。

本書のキータームとなる「複ゲーム状況」については、杉島 [2008] に詳しい。複ゲーム状況とは、「両立しえない規則／信念が同時並行的に作用する事態」[杉島 2008: 2] である。近年の人類学では、無時間的な社会構造や体系的統合体としての文化や社会を描いてきた反省から、混交や変化が中心的

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科